

# 江戸川乱歩「緑衣の鬼」論

——〈狂人〉表象をめぐって——

## 序論

「緑衣の鬼」(『講談倶楽部』一九三六年一月～三七年二月)は、江戸川乱歩によるイーデン・フィルポッツ「赤毛のレドメイン家」(Eden Philpotts, *The Red Redmings*; The Macmillan Company, 1922. 以下「赤毛」)の翻案作品として知られる。乱歩は同作を高く評価しており、読後の感想として「濃厚な色彩残像」「犯人の感情が実によく浮上つて描かれていること」「犯罪ともつれ合つて描かれた恋愛の魅力」「風景描写」などを挙げ、

今年の初め、ふとしたことから名古屋の井上良夫君にフィルポッツの長篇探偵小説を数冊借覧したのであるが、その内の一冊「赤毛のレドメイン一家」がひどく私を喜ばせた。アア、まだこんな面白い探偵小説を読み残していたのかと、夜を徹して読み終つたあと、私の中の「鬼」がムクムクと頭をもたげ始めたのである。<sup>(1)</sup>

と感慨を漏らしている。そしてこの刺激を受けて「娯楽雑誌の連載ものに、その筋を取り入れることを思いつき、あの名作を一層通俗

## 鈴木優作

的に、また、私流に書き直したのである<sup>(2)</sup>と云うように、乱歩は自らの通俗作品に同作のプロットを取り入れるのである。

さて本作に対する評価であるが、水谷華が「作者が日頃から雑文に論説にその抱負感慨をもらす理想から遙かに離れたものであつて、その批評はむしろ差控へるべしと一般の見解のやうである」と述べ、戦後に中島河太郎が「原作の赤毛を全身を緑色で装うた謎の人物に仕立てたのは、娯楽雑誌向けのサーヴィス過剰の気味がある<sup>(4)</sup>」と評したように、同時期の評論活動において追求された探偵小説理念と乖離した眼高手低の通俗作品と見做されてきたと言つて良い。何より作者自身の「この正月号から又イヤイヤながらも続きものを二つ書きはじめた<sup>(5)</sup>」という証言がそうした評価を強固にしている。

だが、「二つ一つの殺人の場面は原作とちがつているし、私の作に類出している「影」の恐怖は、原作には全くないもので、犯罪の動機と大筋だけをフィルポッツから借りたものだ<sup>(6)</sup>」という自負も一方であるように、通俗化の過程で独自の趣向が凝らされたことは看過できない<sup>(7)</sup>。両作の相違点として、戦争神経症の叔父・ロバートが出没しレドメイン一族の人々を殺害してゆくかに語られる「赤毛」

に対し、本作「緑衣の鬼」では緑色に異常な執着をみせる「緑衣の鬼」（以下「鬼」）が連続する殺人事件の現場に影を見せる。こうした相違はありながらも（「狂気」を帯びた人物が物語を通じてミスリードとして機能しており、「狂気」を大きなモチーフとして捉えることができよう。そこで本論では、本作の（「狂気」表象における同時代言説との相関を読み取る中で低評価の所以たる通俗性を再検討し、また同時期の乱歩の探偵小説観との距離を探る中で、通俗化・形式への志向といった作者の思惑を出発点としながら、「狂気」表象の変奏が精神病言説の文脈の中で獲得した意味作用について論じ、「狂気」モチーフを軸とした作品の再評価を試みたい。

### 一 戦争神経症から「緑色狂」へ

まず、両作における（「狂気」モチーフの担い手たるロバートと夏目太郎を比較してゆく。「赤毛」では、ダートムアで休暇を楽しむ探偵マーク・ブレンドンのもとにジェニー・ペンディングンから知らせが届き、夫マイクルが赤毛の大男の叔父ロバート・レッドメインに殺され死体を持ち去られたと言い、助けを求める。そしてブレンドンは次のように推理する。

「戦争神経症に罹った軍人が、ペンディングンと争って、その喉笛をかき切ったんですよ。」

「こんどの事件では、戦争神経症に罹っていたレッドメイン大尉が、突如、理性を失ったということに特徴があります。」

また、別の叔父でロバートの兄に当たるペンディングンが殺害された際

にも「気が狂っていれば、なにをするかわかったものじゃない」と述べる。このように、ブレンドンの推理によるとロバートは第一次大戦従軍中に罹患した戦争神経症のために理性を失い、それゆえに喉笛を切り死体を持ち去るという凶行に至ったとされる。そして、この推理はダミーであり戦争神経症という（「狂気」）がミスリードとなっている。高林陽展によれば、同症は第一次大戦中に生じた兵士の戦闘不能状態で「放心状態となり、話しかけても沈黙をもって応え、返答にならない言葉が口から漏れる」といった精神病患である。小俣和一郎は同大戦について「長期にわたる塹壕戦、それまでの戦争にはなかった戦車、飛行機、潜水艦などの登場、それに史上初めての本格的な毒ガス戦などが、戦場の兵士に与えた精神的影響はまことに前代未聞の大きさであった」と言い「神経戦」という語の登場をその象徴とみる。同症は当時人々に次のように認識されていた。

精神病院における戦争神経症患者に対する一般的な関心は精神的負傷に関する否定的な話題を伴っていた。戦争神経症の退役軍人を道徳的に不健全ないし明白に危険であるとさえするイメージが戦後のメディアに現れ始めた。<sup>10)</sup>

従って、ロバートの（「狂気」）は当時の同症患者を危険視するまなざしを反映していると言えるだろう。だがそれだけでなく、ブレンドンが「あの不幸なひとが正気をとりもどしてくわしく説明してくれ」と助かるんですが「祖国のために戦った、いや、それも、だれよりもりっぱに戦った人物が、精神病院内に監禁されて、その生涯

をおえるなんて、考えてみただけでぞっとすることです」「それよりも、殺人は戦争神経症の発作のためだと立証したほうが、はるかに無罪にしやすいと思います」と述べるように、ロバートという存在は同症の治療と社会復帰、傷痍軍人の待遇、心神喪失者としての法的処遇といった社会・法制度における位置付けに対する問題を孕んでいるのである。

一方「緑衣の鬼」では、この戦争神経症という属性は捨象されている。日本でも日露戦争報道において戦争と神経症との相関は既に認知されていた<sup>11)</sup>。また、乱歩作品において「芋虫」(『新青年』一九二九年一月、初出「悪夢」)で四肢を欠損した廃兵が登場し「何者」(『時事新報』一九二九年一月二八日〜二月二九日)では徴兵忌避が扱われているように、個人に対し戦争が及ぼす負の作用への視点も見受けられる。従って、この捨象は自ら「講談社党」<sup>12)</sup>とも称する乱歩が「娯楽雑誌の連載もの」に「一層通俗的に」書くと考えたゆえの判断であろう。プロットを辿ると、探偵小説家・大江白虹が巨人の影法師による笹本芳枝への襲撃を目撃し、芳枝の相談に乗っているところ笹本夫婦が連れ去られてしまうが、後に芳枝は助け出される。白虹は調査の結果、芳枝の従兄で「緑色狂」の夏目太郎を犯人とみる。やがて芳枝の夫・静雄と見られる死体が発見され、太郎の父・菊次郎(「赤毛」のベンデイゴに相当)も無惨な溺死体として発見される。

この異常な所業によっても想像されるように、夏目太郎は一種の精神病者であった。まったくの狂人というのではなく、或

る場合は常人よりも鋭い智慧を示すことがあつたけれど、精神異常の争えない証拠は、彼の色彩への不思議な偏執に見ることが出来た。まだ罪を犯さない前の彼の住居は、何から何まで緑一色に塗りつぶされていた。住宅ばかりではない。着衣や持物は勿論、雇人の老婆の白髪頭までが、無気味な緑色に染め上げられていた。彼がその実父夏目菊次郎を殺害した心理も、この精神異常によつて解釈する外はなかった。いくら反目し合っている親子にもせよ、常人にこんな無残な所業が出来るものではない。(以下、傍線は引用者)

以上のように、語り手は白虹の内面に寄り添い「(狂気)を犯行動機とした推理を代弁する。白虹は太郎の色彩への偏執と実父の無惨な殺害を異常性という共通項で結びつけ、「狂人」太郎を犯人とするのである。

谷口基は「殺人の容疑者をシエル・シヨックの元軍人から緑衣の怪人物へ、探偵の恋敵をイタリアの没落貴族から美貌の秘書へ、という改変にともない、(戦争とエキゾシズム)という原典のモチーフに替わる濃厚な猟奇趣味が本作の全篇を貫くこととなった」<sup>13)</sup>と指摘する。戦争神経症から「緑色狂」への改変は、強烈な色彩イメージによつてより感覚的・直接的に読者に「(狂気)」を伝える。この緑は単に赤毛の赤の補色であるだけに留まらない。ロバートの赤毛と赤チョッキが彼の存在を顕示し同一性を担保する記号であるのに対し、全身に纏われた緑衣そのものが「(狂気)」に直結する換喩として「(狂気)」を可視化している。このような「(狂気)」の視認性は、見る

〈常人〉／見られる〈狂人〉を隔て、読者を前者に配置しつつ後者を常人と異なる異常な存在として差異化する。柴市郎は、明治三〇年代後半から雑誌記事を中心に「精神病院參觀記」と総称できる言説ジャンルが形成され、精神医学のまなざしの下で症候を比較・分類された患者たちを収容する精神病院が、參觀者に対して患者を展示する施設として位置付けられてゆく様から、精神病患者の〈見世物〉化を指摘している<sup>15)</sup>。大正・昭和期にも、宇津木さかん『巢鴨精神病院參觀記』（『第三帝國』一九一六年一月）杉村幹『脳病院風景』（北斗書房、一九三七年四月）などがみられるように同ジャンルは存続し、そうした見る／見られる関係における差異化された精神病患者の持統が窺える。娯楽読物の長期連載である本作において読者の興味を引き続けてゆく「洋服は勿論帽子もネクタイも靴下まで、萌えるような不気味な緑色の」「緑色狂」という「不思議な精神病患者」の「怪人」「緑衣の鬼」とは、まさに〈見世物〉化された精神病患者に他ならない。

以上のように、「赤毛」の通俗化の過程で〈狂気〉モチーフは、戦争神経症という対社会的問題意識を含む特性が直訳されず、〈常人〉から差異化され視覚的に訴求する奇異な〈狂人〉像へと翻案されたのである。

## 二 白虹のダミー推理を支える〈狂気〉言説

それでは、「鬼」へ向けられたまなざしにおける異常性とはいかなるものか。白虹の犯人Ⅱ（狂人）説を支える論拠としての異常性

を〈狂気〉言説を参照し分析してゆく。第一の犯行である笹本夫婦への襲撃に関して、木下警部の「殺害した夫の屍体をなぜ態々運んで行つたか。何の必要もない無駄骨折りとしか考えられないじゃないか」という疑問に対して白虹は、「犯人は恐らく正常な人間ではありませんまい。いまわしい先天性の犯罪者かも知れません」と、死体を持ち去るという犯行の不合理性から犯人を〈狂人〉と推測している。そもそも常識的観点から理解不可能な舞いが〈狂気〉なのであり、ロンドン大学病院精神科医・精神病学教授バーナード・ハートが『狂人の心理』（中村古峽訳、日本精神医学会、一九二七年一月）において「狂人の特徴のうちで最も普通で、最も明瞭で、また最も顕著なものは、彼の明かな不合理性である」とその特徴の第一とするように、不合理な行動は〈狂人〉と率直に結びつけられる。そして白虹は、静雄の死体が銀行に預けられたトランクから見されたことと、太郎の父・菊次郎が無惨な溺死体として発見されたことについて次のように解釈する。

「彼の所業は狂人と考えないでは説明のできない節があるので。例えば、笹本静雄を殺害した気持は常識でも判断できないことはありません。しかし、その死体を銀行の金庫の中へ隠すなんて仕草は常識以上です。また、あいつはほんとうの父親を殺しているではありませんか。（…）激情の余りあの残酷な所業をしたのですが、それにしても実の父を手にかけるなんて、常人には考えも及ばないことです。」

即ち犯行の不合理性、残酷性、尊属殺人である点を精神錯乱の発露

とみる。岩藤章「精神病者の事故並に之が取締に就いて」(『警察新報』一九二九年五月)に「殺人、傷害等の犯人が精神異常者であつた例の珍しいものでないことは云ふ迄もない。否寧ろこの種の犯人の犯行時の精神状態を厳密に調査するならば、精神低格者若くは變態的異常な分子を持つて居ないものが、却て少いことになるのではないかとさへ思へる。」とあるように、同時代の警察によつて他者を殺傷する犯罪の多くは「精神異常者」によるものと認識されていた。『読売新聞』(一九三七年七月八日朝刊)にも「狂人氾濫 殺傷事件の七割五分は実に彼等の仕業だ。相談所、いよく店開き」とあり、同様の主張に具体的な数値を示しリアリティを付与している。また、尊属殺人は「最モ残忍ノ所為ナリトスル」ゆえに刑が加重されており、精神病者が実父を殺害する事件は「惨事」「凶行」として報道されていた。即ち尊属殺人は残忍であるとの認識があり、その残忍性がテクストにおいて〈狂気〉に帰せられているのである。以上のように、異常性に着目した白虹の推理は不合理性、残虐性を〈狂気〉の特質とする同時代言説に準拠しているのである。

さらに、白虹の内面と同レベルに位置する語りも他の〈狂気〉言説を呼び寄せる。「鬼」の大きな特徴でとりわけ強調されるのは、乱歩が原作には全くないものと自負する「影の恐怖」即ち影を見せるとは忽ち消失する神出鬼没性である。語りは探偵・乗杉龍平の登場するプロット中盤まで幾度も繰り返し、「緑衣の怪物、この不思議な精神病者は、何か常人には想像もつかない魔力をでも備えていたのであろうか。」

「彼は狂人へのみ許された神通力をでも備えていたのであろうか。」と、自由自在の神出鬼没性を〈狂人〉固有の魔力・神通力に帰する中西進は上代における〈狂〉概念を神的存在の知覚に関わるとし、また謡曲のものの狂ひを例に神秘や畏怖という〈狂〉の性質を挙げている。<sup>18)</sup>近世の狐憑き概念からも理解できるように、民俗史的に神秘的な力と〈狂気〉は親和性が高く、それが〈狂人〉特有の魔力・神通力として表現されているのである。

このように、本作における狂人「狂人」説には犯行の不合理性・残虐性・超自然性を〈狂人〉の特質とする言説が背景にあり、それらが相俟つて喚起する奇異な〈狂人〉像が「鬼」のミスリード性を担保している。白虹のダミー推理は同時代の精神病者に対する社会的まなざしに同化することで成立しており、本作における通俗性はこのまなざしによつて構築されているのである。

そもそも、〈狂気〉と犯罪の親和性は近代日本を通じて常に強固な言説として存在していた。法制度の面から見れば、一八七三年「東京番人規則」において「放し牛馬」「狂犬」と並び「路上癡狂人アレバ之ヲ取押へ警部ノ指揮ヲ受クベシ」<sup>19)</sup>と取締の対象とされ、一八七四年三月二八日警視庁布達規第一七二号において「狂病ヲ発シ候者猥リニ徘徊シ候テハ人ノ患害ヲ為少カラズ甚シキハ火ヲ放チ或ハ殺傷スル等」と精神病者を社会にとつて危険な存在とし家族の責任において隔離すべきとされる。また、呉秀三は「一体精神病者は犯罪をなすことが少なくない」と言い、杉江董は「精神病と犯罪とは互に密接なる関係を有するものと謂はざる可からず」とし、金子

準二は「精神病と犯罪は同胞」であつて精神病者程社会的危険性の極めて高いものなからう<sup>(22)</sup>と述べるように、近代を通じて精神病者と犯罪を相関づける言説が精神病学者によって継承・強化されている。本作において残虐な殺人を「精神異常」によって解釈しているように、悪質な犯罪を精神病者のなせるものとする解釈は次に述べられるように一般的であり、

彼等(精神病者・引用者注) 对社会の問題は或は一家の鑿殺に、或は放弄火に、或は異様の風姿言行に、又は突然の暴行爲に、日々新聞記事の種となり所謂文明の惡の華を咲かせつゝある<sup>(23)</sup>。

時にそうした言説は、悪質な犯罪を精神病者に帰したいという欲望に自覚的ではある。

どんな困窮にも相扶け合ふべき肉親らが、金ゆゑにその夫を、その弟を平然と死に追ひやつたと云ふ、五万五千円の保険金詐取未遂事件が伝へられてゐます。私たちはかうした異常な事件に直面するとき、たゞ眼を覆ひ、彼等が寧ろ常人と異なる精神病者であつてくれと望む感情の強いものがありますが<sup>(24)</sup>、

加えて、「駐在巡查と妻 夜中凶漢に襲はる 犯人は監置中の精神病者 血だらけで潜伏中逮捕」といった、罪を犯した精神病者の逃走・潜伏を知らせる報道も「鬼」のミスリードとしてのリアリティを強化しただろう。このように、明治期以降の制度・精神病学者・メディアによって(「狂気」と犯罪の親和性が自明化されていき、とりわけ悪質な犯罪は精神病者のなすものとする解釈が一般化されていったのである。

以上のことから、本作における見られる(「狂人」)像とは、危険性・異常性を帯びて日々の紙面を賑わす犯罪者——即ち加害者としての(「狂人」)表象であると言えよう。

そして、こうした近代社会における(「狂人」)を加害者とするまなざしの萌芽は国内における精神医学の発展と関わっている。先の資料「東京番人規則」等にて確認したように精神病者の監護は明治初期においては警察の監督下に置かれており、精神医学は主体的な指導性を有していなかった。しかし、一八八二年旧刑法第七八条「知覚精神ノ喪失ニ因テ是非ヲ弁別セサル者」に対して導入され始めた精神鑑定が一九〇七年公布の刑法三九条で「心神喪失者ノ行為ハ之ヲ罰セス 心神耗弱者ノ行為ハ其刑ヲ減輕ス」と精細に規定された際、この心神喪失者・心神耗弱者の弁別について呉秀三は「二者ノ説明ハ、必ずヤ精神病学者ヲ待ツテ、之ヲ決定シナケレバナラヌ<sup>(26)</sup>」と、同鑑定への精神医学の導入を主張した。この精神医学の司法への接近は、芹沢一也によれば精神医学が犯罪の領分を侵食することによって、そこに狂気の領分を確保するためであつたという。犯罪における(「狂気」)の発見が拡大されればされるほど精神病院をはじめとする精神医学的な施設の設定が促され、予防としての精神医学の発達が必要となる。よつて呉は「甚きは殺人放火するものさへ、精神病の爲めなれば、無罪として放免せらるゝ。(…)危険至極ではないか、法律の上で宥して置いて而も之を取締る方法や施設がないとは驚くべき事である」とも訴えているのである。芹沢は言う。

司法において精神病者の無罪を証した狂気を、社会における

有罪判決の根拠に反転させること、あるいは裁判所においては  
はなく、それとは異なった場所で狂気の犯罪性を問うこと、こ  
れこそが司法との交わりにおいて精神医学が達成しようとした  
ことがらであった。

ゆえに、狂気と犯罪は相互に密接な関係を持つているという命題  
を成立させるため、犯罪という事実を〈狂気〉という隠された原因  
へと還元する操作により、顛倒した両者の因果関係が構築された。<sup>28)</sup>  
換言すれば、現実社会における犯罪と〈狂気〉の接続自体がミス  
リード的性質を帯びていたのである。その接続の作為性にまで本作  
が自覚的であったとは言えまいが、作中における〈狂気〉のミス  
リードを成立せしめる後景としてこの現実における〈狂気〉のミス  
リード性が伏在しているという意味では、両者は相似的關係にある  
と言えよう。

### 三 菊太郎・乗杉の推理と科学性

さて、以上のような白虹の〈狂気〉言説に基づく犯人Ⅱ〈狂人〉  
説は、菊太郎の兄・菊太郎と乗杉の登場によって覆されてゆく。菊  
太郎は相次ぐ事件に関して次のように言う。

「わしは太郎という人物をよくも知らないのですが、まったく  
の精神病者と仮定しても、あれの行動にはなんとなく理解しが  
たいところがある。ときどき追っ手の眼の前で煙のように消え  
失せるというのですが、第一そんなばかなことがあろう道理  
がない。わしは科学者として、そういう神変不可思議を信する

ことはできません。」

直後に地の文で「老人は、科学者の直覚で、何か事件の裏にひそむ  
微妙なものを感じている様子であった」と再度強調されるように、  
科学者・菊太郎は科学的視点から〈狂人〉ゆえの魔力による犯人消  
失を否定し、一般的イメージに基づく犯人像の一部である超自然性  
を掘り崩す。この場面对応する「赤毛」では犯人の神出鬼没性の  
強調がないため、アルパート叔父の発言は「あのあわれな男が、か  
りに生きておるにしても、一年間もおなじ服装でいられるものでな  
い。そんな格好で、ヨーロッパの半分を旅行して、この土地まで  
やってくるなんて、おかしいとは思わんかね」という率直な論理で  
ある。

そして菊太郎の知人である名探偵・乗杉の登場となるが、この菊  
太郎と乗杉の登場の語りに変化が見られる。これまで幾度も  
〈狂人〉の魔力・神通力の存在を煽ってきた語りが、

不可能が行なわれた。夢か怪談としか考えようもないくらいだ。  
精神異常者夏目太郎には、何か正常人には想像も及ばない、地  
獄の魔力が備わっていたのであるうか。だが、ここは童話の国  
ではない。われわれは怪談を信することはできない。いかに不  
可能に見えようとも、そこにはなんらか可能の手段が残されて  
いたのにながらないのだ。

と、それらを否定する。そこには白虹のイメージに基づく推理——  
菊太郎による超自然力への疑問——語りの変化——乗杉の科学的推  
理、という推理レベルの推移が窺える。これまで白虹の内面に添っ

ていた地の文の変化は、読者の目線を科学的視点に引き上げる予備動作と受け取れよう。

乗杉は推理の出発点として「如何に狂人の病的な魂だと云つて、物理学の法則を破つて行動することは出来ません」とより具体的に科学性を表現し捜査に着手する。また、この論理は〈狂人〉を他の人間と同様にみなすことをも意味し、その異常性・危険性・神秘性を強調する白虹と異なり乗杉は〈狂人〉と〈常人〉の同質化を起点に推理をしている。そもそも白虹が太郎の自宅・緑屋敷を訪ね「主人は少し頭が変だということだが、乱暴をするようなことはなかったのかい」と老婆に聞き込みをした時点で、「エエ、滅多にそういうことはございませんでした。それでなくては、いくらお給金を戴いたつて、とても勤まるものじゃございません。」と太郎の暴力性を予め否定するという伏線によつて〈狂気〉と危険性の不一致が示唆されていたことも付言しておこう。

そして乗杉は疑問点を整理し、犯人はなぜ静雄の死体を銀行の金庫に隠したか・またなぜ実父を残酷に殺害したのかという「二つの不可解」、及び犯人の各所での消失という「五つの不可能」を提示する。なお、前者は二つの死体とともに「赤毛」には登場しないゆえに、そして後者も先述したように、共に独自の論点である。前者は〈狂気〉言説に依拠する犯人の不可解性・残酷性への疑問、後者は超自然性への疑問と言える。これらの疑問に対し、前者は死体が静雄でなかったがゆえにできるだけ隠匿しておくため・相手が実父でなかったためとし、後者は幻灯機械と腹話術によるトリック、と

乗杉は真相を暴く。つまり、ダミー推理の中で不可解性・残酷性・超自然性といった〈狂気〉言説により作り上げられた〈狂人〉としての犯人像が、真の推理における科学的思惟によつて整理され一点否定されるのである。かくして、謎の論理的な解明という探偵小説ドラマツルギーは、同時代言説とも重なる〈狂人〉の異常性と犯罪との結びつきを切り離してゆく過程となっている。

さらに、こうした科学という語用に関して、乱歩は同時期のエッセイにおいて探偵小説における科学性として「物理化学の智識」と「筋を運んで行く論理的手法（探偵の推理）」を挙げ、探偵小説本来の科学性は後者にあるとしている。本作の推理における論理的思考を科学・物理学と称して提示し強調しているのには、物理化学と論理を科学の名称の下に地続きに捉える、当時の乱歩の探偵小説観が反映しているであろう。

そして、白虹と菊太郎・乗杉の人物造型も彼らの推理と対応関係にある。白虹は知人である木下警部に捜査協力し推理を開陳するなど社会に交わり、芳枝救出後は人気作家となる。その一方で、菊太郎は隠棲し研究に没頭する「学問好きの奇人」であり、乗杉は雑学者で犯罪心理学や世界犯罪史に深い造詣を持ち平刑事として活躍したこともあったが「いつの間にか居所が変わり」「奇人乗杉は完全に世間から姿をくらましてしまった」と紹介され、連載中には「驚嘆！ 乗杉探偵の奇策奇謀<sup>20</sup>」との惹句も用いられるように、奇人として設定されている。乱歩作品における探偵像といえは明智小五郎が第一に想起されようが、通俗長篇以降の地位や名誉を獲得した明

智のような造型ではなく、あえて「D坂の殺人事件」(『新青年』一九二五年一月増刊)など初期短編における雑字者・奇人性を付与していることからも意識的な人物形成であると言えよう。社会により密着する白虹の推理が一般的(『狂気』イメージに基づくの)に対し、菊太郎や乗杉は社会から離れた存在であるゆえに科学性を具備している。このような推理主体における社会からの距離感と推理の科学性の比例は、社会と言説との密着性の表出と捉えることができよう。これらの人物造型も原作「赤毛」とはやや異なり、ブレンドン  
はロンドン警視庁で警部の地位を目前にしており社会に即した存在であるが、アルバートは書籍蒐集家として隠退してはいるものの以前イギリスの大書店で重役を勤めていた。ガンズに関しては「警察に職を奉じている人間で、ガンズ氏のお名前を知らぬということはない」というほどに「功成り名をとげられた」「偉大な人物」で、奇人と程遠い。

#### 四 形式への志向

以上のように、本作はミスリードによって隠蔽された謎を徐々に推移する推理主体が論理的思考によって解明する、という謂わば規範的な探偵小説構成をとっているが、これは「赤毛」に喚起された乱歩の形式への志向と関わる。

乱歩は「赤毛」について「のつびきならぬ筋の脈絡が、巧みにも有機的な照応が、生きものの血管のように張り廻らされて」おり、ガンズの心理探偵術は読者に「アア、これは本物の探偵小説だぞ」

との喜びを与える<sup>(31)</sup>、とその本格性をも高く評価している。そして山前譲が指摘するように、この読書体験を契機に乱歩は読者としての本格探偵小説への情熱を湧かせ英米の作品を渉猟し、探偵小説評論を積極的に発表するようになるのである。そもそも「赤毛」を乱歩に紹介した井上良夫にしても「探偵小説の持つ特殊な面白味には、まず何よりも「論理的な面白味」が挙げられなければならないと思<sup>(32)</sup>う」と述べているように、こうした志向を乱歩と共有していた。

この読書体験から乱歩は後に『鬼の言葉』(春秋社、一九三六年五月)として纏められる幾多の評論において旺盛に(『探偵小説』)の概念化を試みる中で、探偵小説を「科学と芸術の混血児<sup>(34)</sup>」とし犯罪、怪奇、幻想の文学をも包含する多様性を認めながらも、「ある難解な秘密を、なるべくは論理的に、徐々に探り出して行く経路の面白さ<sup>(35)</sup>というものが主眼になつていなければならぬ」「多様性を混沌たる多様性のままに放置することは望ましくない<sup>(36)</sup>」として論理性に比重を置いている。従って、抑も大筋を「赤毛」から借用していることも作品形式に当然直接関わるうが、「探偵小説とは難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である<sup>(37)</sup>」という連載同時期の定義や評論活動における論理・形式への志向の作用も伴って、本作では言説の利用による謎の強化・推理主体の推移という論理的解明の漸進性・論理性の強調といった諸点に原作よりもアクセントが置かれたと考えられる。加えて、同時期の論理性に関する議論の中で乱歩は、

科学的な論理でもいい。常識的な論理でもいい。少くとも俗

に云う理窟にかなった解決でなくてはいけない。(…)例えば狂人の論理というようなものがあるとすれば、そういう非論理によつて秘密を解決する型のもは、文学としては如何に優れていても探偵小説の条件にはかなわぬ。<sup>38)</sup>

と言ひ、また「探偵小説作法の一つの重大なコツは、一見不可能な事柄に、意外な可能性を見出す術だと云える。それは魔法靴、魔法杖のお伽噺の興味を、もつと大人向きに、論理科学的にしたものであり(…)と述べている。これら、狂人の論理のような非論理に依存した解決——即ち白虹の如き〈狂気〉を措定しその非論理性に基づく推理——ではなく理窟にかなつた解決、不可能から可能へ——即ち〈狂人〉の魔力の否定——という要素は、本作における謎の解決過程の性質そのものである。

このような形式性に拠つて、一方ではミスリードがより通俗的であるゆえ一層推理の論理性が際立ち、他方では解決の論理性により〈狂気〉に纏わるミスリードが改めて認識されるといふ点から言へば、本作は形式性を梃子に、読み手に対して読み手自身の〈狂気〉に対する通俗的まなざしの自覚を喚起するテクストなのである。

そして同時に、本作における〈狂気〉イメージの論理的思惟による否定という面は、次のクラカウアーの言を参照するならば、そのイメージの強固さを物語っていることにもなる。なぜなら、探偵小説という虚構世界において探偵に担保されテクスト内で追求され達成される論理性即ち「合理」の勝利は、却つて現実社会におけるその不在の反照に他ならないからである。

自律性を求める合理の要求は、探偵を神そのものの反映にまで高める。超越を拒む内在が、超越の後釜に座るのである。探偵に全知と遍在の仮象が付与され、そしてまた、摂理としての探偵が事件を阻止し、あるいは解決に導いて賞賛されるのは、そうした歪曲の美学的な表現である。だが、探偵は、その形象の完全さとか、その存在の不思議な力とかいった、擬古的な意味において神なのではない。探偵が人物像の謎を解き、知的な推論によつてすべての本質的な特性を服従させることが、探偵を支配者にするのである。探偵小説は、目の眩んだ合理には見ることができないものを、容赦なく暴露する。つまり、合理の思いあがった神性が、現実ではいかに役に立たないかを明らかにするのだ。<sup>39)</sup>

## 五 不在の被害者としての〈狂人〉

本作の結末において乗杉は菊次郎の秘書・山崎（＝笹本静雄、「赤毛」のドリアン・マイクル・ペンデーンに相当）と芳枝を真犯人として指弾し、夏目太郎はこの二者に財産を狙われ〈狂人〉ゆえに犯人として偽装され、トランクに詰め込まれた死体として銀行で発見されるに至つた「本当の被害者」であると言及される。即ち、加害者としての〈狂人〉像が否定されるばかりでなく、それが被害者であつたという真相が明かされるのである。また、夏目の死体は発見時には静雄と見られていたのであり、その殺害状況は乗杉の推理における回顧の内にある。換言すれば、〈狂人〉夏目太郎は語り

手や他の登場人物の語りの内のみ登場し、徹頭徹尾、テキストにおいて不在である。

このような、結末における〈狂人〉の加害者から被害者への表象の反転は、現実社会における精神病患者の実相と重なる。精神医学的視座の下で危険視されていた精神病患者は、一般社会から排除され自宅監置や精神病院において監禁の対象とされた、という点において被害者という立場にあったと言つてよい。本作の同時代には、夢野久作『ドグラ・マグラ』（松柏館書店、一九三五年一月）において逃れられない監獄の如き精神病院に収容される被害者としての精神病患者が描かれており、これを問題化する意識が見出せる。

ドウセ治療らぬ病氣と決定れば。医師に見せるは体裁だけだよ。棄てて来るのが本当の腹だよ。生きて生き甲斐無い此の病氣。

どうぞよろしく頼みますと。頼む挨拶ウラから聞くと。若しも治癒れば迷惑千万。ならう事なら殺して欲しいと。云はぬ心がハツキリ見え透く。此処が患者の生死の境ひで。医者が大いに儲かる処ぢや。

また、テキストにおける実像の不在については、社会における精神病患者を圍繞するまなざしの抱える問題と繋がろう。佐藤雅浩は、近代日本のマスメディアが精神疾患という現象を事件や犯罪に関わる「危険な他者」の問題として表象してきたことを指摘し、こうした〈狂気〉に対する好奇のまなざしが作り出す形象を「他者化された狂気の表象」と呼ぶ<sup>12</sup>。主体として立ち現れることなく肉声で語ることもない〈狂人〉の不在には、メディアによるフィルターを通し

て一方的に客体として語られることで常人との差異が反復・強化されてゆく、精神病患者の他者性が窺われる。

本作同様に〈狂人〉をミスリードとする構造の探偵小説は、同時代においても見受けられる。大阪圭吉「三狂人」（『新青年』一九三六年七月）では三人の精神病院患者の脱走を装い院長が患者を殺害し逃亡を図り、横溝正史「真珠郎」（『新青年』一九三六年一〇月）三七二年二月）では殺人者と発狂者の血統を受け継ぎ蔵の中で殺人鬼として純粋培養された真珠郎が連続殺人の犯人と目されるが実際は誰も殺さぬまま死んでおり、波多野狂夢「狂つた人々」（『探偵文学』一九三六年一二月）では入院患者が第一容疑者とされ、大下宇陀児「殺人病患者」（『キング』一九三七年八月増刊）では凶悪な〈狂人〉が逃亡しているとされるが実際は真犯人に利用され殺害されている。これらの作においても本作同様の〈狂人〉像の反転がみられるのであり、同時代の探偵小説もまた少なからず、事件の表層的認識から論理的思惟による真相の発見への到達というジャンル固有の力学の中で、〈狂気〉と犯罪の短絡的接続の誤謬、及び不在の被害者としての精神病患者像の提示という構造を共有していたことが理解できよう。

## 結論

本作におけるミスリードとしての〈狂気〉は、真相を隠蔽することによって謎を強化し、その科学的解明の明晰さを際立たせることによって作品の形式性を支え、乱歩の志向した理念的探偵小説の構

築に寄与した。このような志向はそれ自体とは異なるレベルにおいて、必然的に、〈狂人〉をその性質から加害者と断ずる読み手の通俗的まなごしを逆照射し、不在の被害者へと内なる〈狂人〉像の見直しを迫る機能をテキストに付与するに至った。この意味において、本作の通俗性とは、テキストに内装された読み手の〈狂気〉に対するまなごしの通俗性であると言える。

以上の考察より、本作「緑衣の鬼」を、ミスリードを軸とした探偵小説ジャンル固有のドラマツルギーの内に、〈狂人〉表象の諸相が展開・転換されることで、近代日本の法制度や支配的言説において持続的かつ強固に内在する〈狂気〉と犯罪の相関の自明視への気づきを促す可能性を孕むテキストとして改めて評価することができよう。

※江戸川乱歩著作の本文引用は『江戸川乱歩全集』（光文社文庫、二〇〇四年七月～二〇〇五年六月）に拠り、「赤毛のレドメイン家」本文は宇野利泰訳（創元推理文庫、一九七〇年一〇月）に拠り、適宜原文を参照した。また文献引用にあたっては旧字体を新字体に改め、ルビ・傍点は適宜省略した。※本論及びその中で言及した作品には今日では差別的と思われる語句や表現があるが、作品の時代的背景と価値とに鑑み、原文に做った。

- 注1 江戸川乱歩「赤毛のレドメイン家」『ぶろふいる』一九三五年九月
- 2 江戸川乱歩「あとがき」『江戸川乱歩全集 第十一巻』桃源社、一九六二年八月
- 3 水谷準「期待される二新人 本年度の探偵小説(2)」『報知新聞』一九三六年二月二日

- 4 中島高太郎「解題」『緑衣の鬼』江戸川乱歩推理文庫第十八巻、講談社、一九八九年四月
- 5 「探偵小説四十年」桃源社、一九六一年七月。また落合教幸・浜田雄介「江戸川乱歩未発表原稿「独語」(『新青年』趣味)二〇一五年一〇月)では、「つまらないものとみくびりながら、どうしてこんなに書くことが出来ないのだろうか」と休載時の煩悶が綴られている。
- 6 江戸川乱歩「あとがき」『江戸川乱歩全集 第十一巻』桃源社、一九六二年八月
- 7 近年では、小松史生子が〈悪〉の表象という観点からフィルポッツにおける客体としての〈悪〉と乱歩における主体としての〈悪〉という構図を提示している。「イーデン・フィルポッツと江戸川乱歩——探偵小説における〈悪〉の表象」第五六回日本比較文学会東京支部大会、二〇一八年一〇月二一日、於明治大学
- 8 高林陽展「第一次世界大戦期イギリスにおける戦争神経症——近代社会における社会的排除／包摂のポリテクス——」『西洋史学』二〇二二年一月
- 9 小俣和一郎「近代精神医学の成立——「鎖解放」からナチズムへ」人文書院、二〇〇二年五月
- 10 Fiona Reid, *Broken Men Shell Shock, Treatment and Recovery in Britain 1914-30*, Bloomsbury, 2010.
- 11 佐藤雅浩「精神疾患言説の歴史社会学」新曜社、二〇一三年三月
- 12 江戸川乱歩「初めての講談社もの」『宝石』一九五三年六月
- 13 谷口基「緑衣の鬼」長編小説梗概 藤井淑禎編『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』『国文学解釈と鑑賞』別冊、二〇〇四年八月
- 14 先述「何者」においても色彩への異常な執着をみせる「黄金狂」がミスリードとして登場する。
- 15 柴市郎「〈狂気〉をめぐる言説——〈精神病患者監護法〉の時代」小森陽一・紅野謙介・高橋修ほか『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店、一九九七年五月
- 16 大塚子成編『改正刑法及施行法・刑事訴訟法・監獄法及施行法注釈』

- 田中宋榮堂、一九〇八年九月
- 17 「雷鳴中の惨事 狂少年弟妹を殺し 実父に重傷を負す」『朝日新聞』一九一六年九月二日朝刊、「実父を打殺す 狂人の凶行」『朝日新聞』一九三〇年九月一日朝刊
- 18 中西進「狂の精神史」講談社文庫、一九八七年二月
- 19 由井正臣、大日方純夫校注『官僚制 警察』日本近代思想大系3、岩波書店、一九九〇年一月
- 20 呉秀三「何故に癡狂院の設立に躊躇するや」『日本医事週報』一九〇六年一月一日、引用は『呉秀三著作集 第二卷／精神病学篇』一九八二年二月
- 21 杉江董「犯罪と精神病」巖松堂書店、一九二二年一〇月
- 22 金子準二「現代犯罪の精神病学的研究」白揚社、一九二六年二月
- 23 大西義衛「新聞種となる精神病者」『脳』一九三三年八月
- 24 「怪奇保険魔の心理」『読売新聞』一九三六年一〇月二日朝刊
- 25 『朝日新聞』一九三二年九月二六日夕刊
- 26 呉秀三「精神病者ト新刑法」『刑事法詳林』一九〇九年一〇月、引用は『呉秀三著作集 第二卷／精神病学篇』一九八二年二月
- 27 呉秀三「何故に癡狂院の設立に躊躇するや」『日本医事週報』一九〇六年一月一日、引用は同右『呉秀三著作集 第二卷／精神病学篇』
- 28 芹沢一也「法」から解放される権力」新曜社、二〇〇一年九月
- 29 江戸川乱歩「探偵小説と科学精神」『科学ペン』一九三七年一月
- 30 「緑衣の鬼」『講談倶楽部』一九三六年九月
- 31 江戸川乱歩「赤毛のレドメイン一家」『ぶろふいる』一九三五年九月
- 32 山前譲「江戸川乱歩の本格探偵小説への情熱をかき立てた評論家・井上良夫」井上良夫『探偵小説のプロファイル』国書刊行会、一九九四年七月
- 33 井上良夫「探偵小説の本格的興味」『ぶろふいる』一九三五年一月、引用は同右『探偵小説のプロファイル』
- 34 江戸川乱歩「探偵小説の範囲と種類」『ぶろふいる』一九三五年一月
- 35 江戸川乱歩「日本探偵小説の多様性について」『改造』一九三五年一〇月
- 36 注34に同じ
- 37 同右
- 38 同右
- 39 江戸川乱歩「不可能説——入口のない部屋・その他——」『文章倶楽部』一九二九年三月
- 40 ジークフリート・クラカウアー著／福本義憲訳『探偵小説の哲学』法政大学出版局、二〇〇五年一月
- 41 引用は『定本 夢野久作全集4』国書刊行会、二〇一八年四月
- 42 佐藤雅浩「精神医学とマスメディアの近代——二〇世紀初頭日本の新聞メディアを事例として」鈴木晃仁・北中淳子編『精神医学の歴史と人類学』東京大学出版会、二〇一六年九月

(すずき・ゆうさく 大学院博士後期課程在学)